

近藤有美ゼミ活動報告

2025
AUGUST 3

TOP MESSAGE ゼミ紹介

今学期のメンバーは5人です。有美先生の新しい試みとして、このゼミの希望者は日本語教育プログラムを履修した人に限定されました。

このゼミは、学生と有美先生の6人の机を円にして全員が向き合い、対話する形式で授業が進みます。内容としては、本を読んで浮かんだ疑問や意見を共有し、それについて話し合う形です。堅苦しい感じではなく、少し話が脱線したり、みんなで笑ったりしながら、明るい雰囲気でディスカッションをしています。

また私たちのゼミでは、テキサス州立大学の学生との交流授業も行いました。日本語教育に興味がある人や留学生との交流に興味がある人には、とても面白く学びのある経験になると思います。

EVENT

テキサス州立大学との 交流授業

私たちは、6月10日の4限に名駅キャンパス、6月18日の3限に日進キャンパスにて、合計2回の交流授業を行いました。この大学としての交流は今年で3年目となります。

テキサス州立大学の学生は、約1ヶ月間、愛知県岡崎市のYAMASA言語文化学院で日本語を勉強しています。そこでは、日本人学生との関わりが少ないため、このような交流会が行われるようになったそうです。



REPORT

活動報告書について

この活動報告書では、それぞれの学生の①テキサス州立大学の学生との交流の内容と感想、②授業でのディスカッションから感じたこと、③3年1期のゼミ全体の感想をまとめます。たくさんの時間をかけて授業のディスカッションを行ったので、②は各章ごとに感想を書くことにしました。また、第1章の感想では、学生が家庭で話している言葉や方言を用いています。

それぞれの感想を共有してまとめることで、私たちがどのようなことを感じたのか、どのように成長したのかを振り返る際に活用します。



BOOK

複数の言語で生きて死ぬ 山本冴里編 くろしお出版

今学期は山本冴里編『複数の言語で生きて死ぬ』を読み、読んでいたときに生まれた疑問や、ゼミのみんなと話し合いたいことを持ち寄り、授業で話し合いました。

複言語とは？複文化とは？無意識にしている私たちの考え方について、改めて考えさせられる本です。

この本には、第1章から終章まで、計11のトピックが収録されています。私たちはその中から、第1章、第4章、第7章を読み、ディスカッションを行いました。1つの章に約4週間と、長い時間をかけ、じっくりと理解を深めました。

ゼミメンバー

- 23052002 新垣琉華
- 23052006 犬飼夏海
- 23052010 大橋芽奈
- 23052014 河本日菜子
- 23052017 小出百美

TOPIC 1

テキサス州立大学との交流授業

テキサス州立大学の学生14人と計2回の交流授業を行いました。

1回目の授業では、有美先生が授業を行いました。NAMIKIBASHIの「日本の形『鮓』」という、日本の寿司屋でのマナーを嘘も交えて紹介されている動画を視聴し、グループに分かれて、嘘？本当？を考え、話し合いました。

2回目の授業では、YAMASA言語文化学院の仲さや香先生が授業を行いました。グループに分かれて、テキサスの学生たちが日本でどのような経験をしたのかを日本語で紹介してくれました。

どちらの授業も明るい雰囲気で、楽しみながら日本語を使って会話をしました。テキサス州立大学の学生も森内先生も私たちのことを気に入ってくれたそうです！



TOPIC 1

感想

今学期の活動の中で1番印象に残っています。NUFS以外の留学生と交流するのは初めてでした。あまり自分の英語に自信がなく心配していたのですが、学生と交流していく中で、相手の言語を完璧に話すことができなくても、伝えたいという気持ちがあれば対話することができることを実感しました。相手の話をよく聞いて、理解しようとする姿勢も忘れないようにしたいです。相手が話しやすいと感じる環境を作るためには、私の聞く姿勢が大切になるとわかりました。(小出)

NUFS以外の留学生と交流するのは初めてだったけど、2回の交流でみんなと仲良くなれて嬉しかったです。私は、あまり自分から話すタイプではないので上手く交流できるか不安だったけど、テキサス州立大学の学生たちからいろんな話をしてくれてとても助かりました。そのおかげで、話すのが苦手な学生に自分から話しかけることもできました。交流する最初の一歩を踏み出す勇気が大事だと思いました。(新垣)

NUFSの学生とはまた違った雰囲気を持っていて面白かったです。私は、結構人見知りが強く2回という回数では仲良くなりきれなかった部分はありました。しかし、学生はあまりない日本人と話す機会に積極的に参加してくれてとても話しやすかったです。寿司屋でのマナーの動画と一緒に見ましたが、リアクションがとてもよくて、去年日本人学生で見た時よりもワクワクしました。2回見たからこそ、海外の人から見たらこの動画はどう映るのだろうと考えることができました。(犬飼)

『やさしい日本語』の勉強はこれまでしてきましたが座学のみで実践は初めてでした。私は今回テキサス州立大学の学生さんと話す中で、テキサスの学生一人ひとりに対しての『やさしい日本語』があることを理解しました。例えばある学生は理解していてもある学生からしたら理解できない言葉があります。その反対もあるでしょう。私は今まで『やさしい日本語』は全ての人に共通しているものだと思っていました。しかしそうではなく、実際には一人ひとりに合わせて形を変えていくものだと気づきました。またそれが言葉だけでなく表情やボディランゲージ、私たちには伝え方や感じ方が私が思っていたよりもたくさんあるということを再認識することができました。完璧じゃないからこそ、不自由だからこそ得られるものがあるということに魅力を感じることができたのは間違いないこの交流があったからです。(大橋)

これまでの人生で、日本語を勉強している非日本語母語話者の方にあったことがなかつたため、最初は、彼らの話したいことが聞き取れるのか、私の伝えたいことは伝わるのかすべてが不安でした。しかし実際に交流してみるとそんな不安もよそに、たくさん会話が出来てたくさん笑って楽しかったです。もちろん彼らの日本語運用能力や、私がわかりやすい日本語を使おうとしていたのもありますが、それ以上にお互いがコミュニケーションを取りたいという強い気持ちをもって接したからこそだと思います。普段同じ母語話者の人と話すときでも、時々話していることがお互い理解できないときがあります。そしてそういったときは聞き返すことが多いですが、諦めることも多かったです。しかし彼らとの交流を経て、諦めずにコミュニケーションをとることの大切さと面白さを学びました。人生において、とても価値のあるものを得られた貴重な機会でした。(河本)

REPORT

◀ 授業外での交流

初めは私が声をかけたのですが、その後は彼らからたくさん誘われ、約4週間で9回も遊びに行きました。初めの一歩を踏み出すことの大切さを学びました。また、授業外という場所だからこそ、学習者目線の授業の愚痴や面白さを聞くことが出来たと思います。授業中にあまり日本語を話さなかつた人も、お酒が入ると日本語をスラスラと話しているのを見て、その授業内だけでその人の言語能力を判断するのは良くないと感じました。

「おすすめは何ですか?」「もちろん」「どうぞどうぞ」などなど、彼らのお気に入りの日本語を教えてもらいました。
(小出)



お酒を交わしながら主に日本語と英語で会話を楽しみました。私の働いているお店のパーティーにも来てくれてとても嬉しかったことを覚えています。時には私たち国際日本学科のクラスメイトである韓国人の学生とも一緒にご飯を食べに行きました。韓国語も交えて話したのが印象的でした。これぞまさに様々な言語で話す、豊か～な空間でした。(大橋)



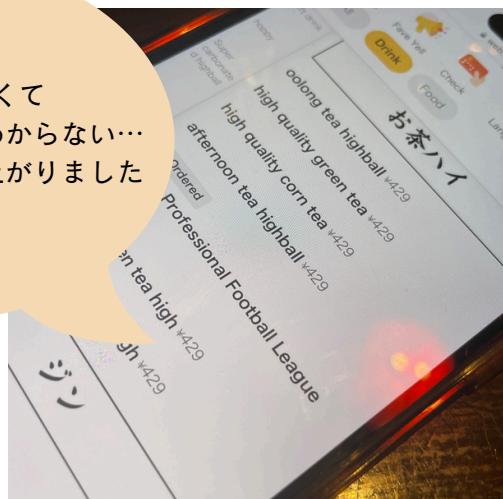
居酒屋やお好み焼き、寿司屋などいろんな場所に数回ご飯に行きました。彼らがどういう人生経験を持っているのかやどうして日本語を学び始めたかなど様々な興味深い話を聞かせてくれました。

またお互い異なる母語話者であるからこそすぐには伝わらないことが多くありましたが、だからこそ2言語を駆使したり簡単な言葉に言い換えたりと豊かなコミュニケーションが出来て楽しかったです！(河本)

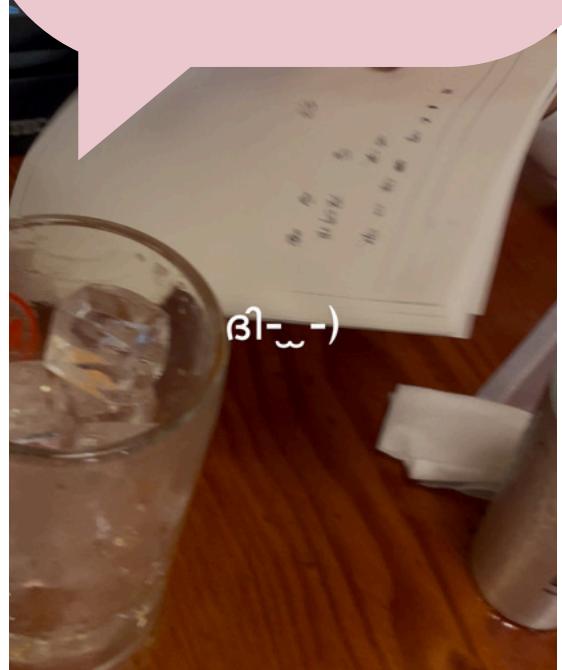


翻訳がおかしくて

どんなお酒なのかがわからない…
推理する時間が盛り上りました



授業では「書く」ことを嫌がっていたのに、居酒屋なら書ける：)



平均身長180cm!!
彼らと行くと狭く感じる
名古屋駅の一風堂



「トロ」を
「DEBU no Maguro」と
言い換えてくれました
(笑)



授業前に
みんなで
お喋りしながら
お昼ごはんを
食べました
at 日進キャンパス

TOPIC 2

◀ 複数の言語で生きて死ぬ

第1章	第4章	第7章
<ul style="list-style-type: none"> ・どうして言語が死んでいく? →話者の大量死、支配ー被支配 <p>☆抑圧のせい?自ら手放している?</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「かれら」の析出と「われわれ」との区別に使われる言語 <p>☆言語の等価性 =言語に優劣はない!</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・伝わらないことが原動力に (フィリピンの例) ・伝わらないことが障壁に (日本の例) <p>☆今後求められることとは?</p>

TOPIC 2-1

◀ 第1章「夢を話せない——言語の数が減るということ」山本冴里

私は方言を恥ずかしいって思ったことが何回もあるじゃんね。変って思われるかもしれないって心配だもんで、外では話さんようにしとる。あと、他の人に通じるように、家でも標準語で話すように練習しとつただに。でも、自分が話しとる言葉がなくなったら、標準語じゃ言い換えれんことがどいつぱいあるって知ったじゃんね。この言葉にも、みんなが話す言葉にも良さがあつて、豊かさに溢れとるってわかつた。私たちは効率を求めすぎとつかもしれんね。みんなが同じ言葉を話す世界、つまらんと思わん?

私がこんなにどつ濃い方言で話しとる想像できんら?これ読むの聞いたらど笑えると思うに。(小出)

大学から内地に来て今まで話してた言葉(うちなーぐち)が通じんってことにしかんだばーよ。だから、うちなーんちゅ意外と話すときは方言で話すことをやめたわけさ。そしたらよ、うちなーんちゅと話すときに「内地に染まつたや」って言われるようになつてから、「自分はうちなーんちゅなのに」って思うことが増えたわけよ。ゼミで方言とか言語について話していくうちに、通じんからこそ豊かになるってことを学んだから、これからはどんどん使っていこうと思うさ。書いて表したらイントネーションとかわからんと思うけど、ちょっとでも伝わればいいさー。(新垣)

自分転勤族やから、めっちゃいろんな方言混ざつとんねやけど、方言ってアイデンティティの一部やし、その言葉でしか表現できひんことあんねんな。でさ、この章で絶滅する言語についても学んでんけど、その言語が伝わらへんってことは、自分の夢を人に話せへんってことやねんな。「言語に優劣ないー」ゆーときながら「英語大事ー」って学校で教わるやん?なんなんやろな。それが自分の言語をほってまうことには繋がつてもて単一化されていくとーよーで怖いわ。英語至上主義に加担せーへんよう気い付けよー思うわ。(河本)

私は自分の方言があんま好きじゃにゃーけど今日は意識して使ってみるがんね。見てみい、全く可愛くないことない?こんなんで話したら、でえら笑われそうだがん。笑われたら頭にくるじゃん?だもんで外では全く使つとらん。この章は私みたいに自分から言わんって決めたつていうんじゃなくて、他からの圧があつて言わんくなつたってやつやつたんだが。いざ自分の方言が制限されるつてことになつたらえらいことだわな。アイデンティティがなくなるつちゅうことよ?小出さんも言つとるよに他と少し意味がちがうんだが。例えば「熱いやかん」と「ちんちこちんのやかん」じゃ「ちんちこちん」のが熱いに決まつとる。自分の言いたいことが言えんくなるつてきついわ。つてまちやーよ、私意外と自分の方言好きなことない?書いとるうちに気づかされたんだがん。豊かさに気づく瞬間つていろんなところに隠れとるね。(大橋)

うちはあんまり方言強い方じゃないから、方言に関して考えることは少ないんけど、ふとした時にあれこれ通じんの!?って驚くことはあるんよ。あ、これ方言だつたのって思う瞬間は自分の個性を感じてるみたいで嬉しくなるなー。たまに標準語の人が方言ないからうらやましいっていうけど標準語も一つの方言なんよ。先生が標準語も誰か山の手方言を標準語って決めただけで良いとか悪いとかないって言ったときその通りだなつてめっちゃ思った。このゼミはみんなそれそれの方言話しとつて、同じ愛知県でも違う方言話し取るからめっちゃ面白い。この豊かさがずっと残り続けんかなって思つとる。あんまり認識されとらんけどこれも日本の伝統的なものだで受け継がれていくべき姿じゃないんかなって思う。(犬飼)

TOPIC 2-2

第4章「ペレヒルと言ってみろ——『隔てる』ものとしてのことば」

見た目で区別できないから、言葉で区別するという歴史があり、それは今でも残っていると感じます。世界の境界が曖昧になっているにも関わらず、言葉や文化に上下関係や正しさがあるという考えが残っていることは問題だと思います。お互いを認め合い、寛容な社会になってほしいです。(小出)

『「かれら」の析出と「われわれ」との区別』というのは、グローバル化が進む現代においてとても危険な事だと改めて思いました。今だからこそ、かつて日本でそのようなことがあった歴史について学んで、これから的生活でどう行動するか考えなければならないと思いました。(新垣)

「かれら」と「私たち」とで区別することは、人ととの間に生まれや育ちなどで優劣をつけることにつながり、とても恐ろしいことです。しかし関西の人、関西ではない人のように、意外と日常生活の中で無意識に区別していることがあります。この章を読んで、もっと自分の言葉に気を付けようと思いました。(河本)

話す言語でその人が現地の人かそうでないかを判別され、最悪の場合殺される。同じ人間で、その国人だからと言ってその人が悪いわけではない。日本だけでなく世界中でそのような過去があつたのだと思うと悲しく思います。しかし、そこまで酷くないにせよ現代にも別の形でそのような風潮があると思います。たとえば、日本人っぽい見た目の外国人でもその人の服装や仕草で日本人じゃないのでは?と疑うことがあります。また、日本と違ったルールで迷惑がかかったというのをSNSなどで見たことがあります。国で判断するのではなく個人を見てあげられる世の中が築かれてほしいです。(犬飼)

議論の中で、私たちは自然と「われわれ」と「かれら」に分けて考えていることを知らされました。この章では「言葉」だけがフォーカスされていましたが私たちは言語だけではなく仕草や服装、髪形なども判断基準になっているのではないかという議論が印象的でした。私たちはたくさんの材料から人を区別しているのです。その中でも言語能力で人を見分けることは後に「われわれ」と「かれら」の間に大きな亀裂を生むかもしれません。私はこの章を読んでから気を緩めず、気を付けて発言しようと決めました。(大橋)

TOPIC 2-3

第7章「『伝わらない』不自由さと豊かさ

——複数の言語で生きるという現実」松井孝浩

愛知県豊橋市で生活する中で、この話はとても現実的に感じたため、この章を取り上げたいという意見を出しました。多文化共生社会を目指している日本で、苦しい思いをしている外国人が多いという現実はとても悲しいことだと感じています。日本人の持つ「日本人像」が大きな壁となっているとわかりました。日本社会で多数派にいる私が、少数派の人々に目を向けて理解しようとする姿勢が必要になると思いました。伝わらないことに「豊かさ」を感じられる人になりたいと思いました。(小出)

私も普段何も意識せず見た目で日本人かそうでないかを判断してしまっていました。しかしそれに異なるルーツがあり、見た目だけではその人が何人かはわかりません。その人のルーツを勝手に決めつけ、「私の想像とは違うかもしれない」という考えを持っていきたいなと思いました。(河本)

この章では「むしろ伝わらないからこそが原動力になる」という言葉に衝撃を覚えました。最初は自分の話す言葉が通じる、理解できる方が魅力的だと思っていたが、言葉の障害がある方が体の様々な部分を駆使して思いを伝えようとするその行動が豊かなコミュニケーションを生み出すことを学びました。言葉に正解はなく、どんな表現もその人の解釈であるからそこに劣つて劣っていないは関係がないということもこれから生きていく中で忘れないようにしたいです。(大橋)

フィリピンではいろいろな言葉が使われていることを知りました。日本は多様性はあるものの日本語で生活する分には困りません。そのため、フィリピンのように場面に応じて言葉を使い分けるというのがあまり想像できないです。日本でいう敬語の使い分けのようなものなのかもしれません、その言葉を使わなければ通じない、母語でない言葉で何かを伝える困難さがそこにあります。勉強の負担も多き大変なことばかりのように思いました。しかし、ある人が『伝わらなさが原動力になる』と言いました。伝えようとするその根性や熱意が何にも代えがたいものになっているのだと知ることができました。言語を統一することだけが幸せじゃないのだと気づきました。(犬飼)

この章では、「伝わらないからこそ豊かになる」ということを学びました。また、外国人と話すときは無意識に日本語じゃなくて英語で話そうとしていることに気づきました。アルバイトでも日本語が分からぬ外国人を接客する際、商品の画像とかを使ってオーダーを聞いた後に「Thank you」と言われるととても嬉しくなります。ここにも豊かさがあると感じました。人種や言葉で判断するのではなく、人としてみることが大事だと思いました。(新垣)

本の内容に対して疑問を持つ姿勢がついたと思います。そのまま受け入れるのではなく、「どうして?」と思うことで、本の内容の理解を深めることができました。また、自分の持つ知識の少なさを実感しました。もっと多くのことに興味を持って、勉強する必要があると思いました。今まで教科書で勉強してきたことが、どれだけ表面的で形式的なものだったのかよくわかりました。多くの人が他の文化に関心を持ち、理解して受け入れる姿勢を持てば、もっとやさしくて寛容な社会になると思います。私の視点は間違っていたなと感じましたが、もっと深くしていく必要があるなと思いました。最初はゼミのみんなとうまくやつていいけるかなという心配がありました。クラスでたくさん話し合ったり、テキサスの学生との交流の準備をしたりして、そんな心配は1ミリも必要なかった今は思います。いい出会いに感謝して、2期もみんなと協力しながら頑張ります!

(小出)

今まで何も気にしてこなかったことを一度立ち止まって考える機会がたくさんありました。一人で読むだけでは何も思わなかった本の一文でも、みんなで読んだら次々と疑問や各々の考えが出てきて、本を読むことという概念が覆された気がします。元々疑問を持つことが苦手でしたが、些細なことだと思ってスルーしていたつっかかりが、実際みんなで議論してみたら些細なことではなくて驚きました。自分の考えや疑問を迷わず発信する勇気がついた気がします。(犬飼)

今期は主に「複言語複文化主義」に基づいた本を読み、それについて疑問に思ったことや話し合いたいことをそれぞれ挙げて話し合ったのですが、問いも、その問いに対する考え方も人それぞれ違い、様々な視点から考えることが出来て面白かったです。

またその問いを考える際、自分の実体験を絡めて考えるため、その本の内容を表面的な言葉だけでの理解にとどまらず、深く考えることが出来、様々な知見を得ることが出来ました。

特に、私は英語教職を履修しているからこそ、第1章「夢を話せない言語の数が減るということ」で、言語に優劣はないはずなのに、日本や世界は英語至上主義になっていること、自分自身もその英語至上主義に加担し他言語を虐殺している可能性があるということを学び、非常にショックを受けました。それから英語を学ぶ意義について問い合わせ続けるようになりました。これからも無意識に行っていることに対して疑問を持ち、考え続けていきたいです。(河本)

最初はゼミって堅いイメージだったけど、先生とゼミメンバーみんなで言語に関する話について話し合うことで、より充実した時間になりました。「なぜ標準語や英語などを学ばなければならないのか」、「話す言葉が異なっていて良いじゃないか」など当たり前のことを疑うという力が身に付きました。また、私たちを取り巻く環境や社会がいかにそうさせているのかが分かりました。自分と違うバックグラウンドを持つ人と関わることで、新しい視点や考えを学ぶことができ、これまでの大学の授業の中で1番自分の為になる時間でした。夏休みの帰省中に、授業で話せるような話題をたくさん見つけて2期に繋げられるようにしたいです。(新垣)

自分が今まで生きてきた中で、何気なく疑問に思ったことや経験したことなどがこのゼミでの議論において、いろいろな視点で見る材料になったことが興味深く本当に楽しい授業でした。それを先生やゼミのメンバーが要約してくれたり付け加えたり、共感してくれたり客観的な視点からアドバイスしてくれたりと『豊かに考える』ことができました。難しいなと思ったことは逆にチャンス!自分の語彙や知恵を学ぶことができるものだと理解できるようになりました。授業は先生が仕切るだけでなくローテーションで司会を回し、話を要約する難しさも知りました。2期ではより活発な議論ができるよう本を読みこんで自分の言葉で自分の思いが説明できるようにします!(大橋)

私たちの方言

- 小出 - 愛知県豊橋市(石巻地区)
- 新垣 - 沖縄県名護市
- 大橋 - 愛知県名古屋市
- 犬飼 - 愛知県大治町
- 河本 - 関西地方(兵庫県神戸市、和歌山県和歌山市、大阪府池田市)
(他影響が少ないもの: 福岡県朝倉市、太宰府市、広島県広島市)